東京都渋谷公園通りギャラリー　交流プログラム「渋ギャラジオ」

令和5年度番組「ふたたび交わるおどろき」

ゲスト1：末永史尚さんをお招きした回のうち、＃1のテキストです。

【「渋ギャラジオ」「ふたたび交わるおどろき」とは】

〇佐藤真実子　皆さん、こんにちは。

　東京都渋谷公園通りギャラリーは、音声コンテンツを配信するプログラム「渋ギャラジオ」を始めます。ギャラリーの学芸員が気になるテーマを設定し、作家や専門家に限らず、様々な人をゲストに招き、生の声を伝えます。

　令和5年度は「ふたたび交わるおどろき」と題した番組をお届けします。2020年に開館後、新型コロナウイルスに翻弄され、共に歩んだと言えるギャラリーの3年間。まずはそのスタート地点であるグランドオープン記念事業の展覧会「あしたのおどろき」に改めて目を向け、関わった皆さんをゲストに迎えて、この3年間の歩みを一緒に振り返ります。また、番組では、ゲストがギャラリーの今と交差するべく、開催中の展覧会について、それぞれの視点での感想を伺います。時間を経て再び交わるからこそ出会う新しいおどろきを声に乗せてお届けします。

　当館の愛称とも言える「渋ギャラ」と「ラジオ」を組み合わせた「渋ギャラジオ」、ぜひ気軽にお楽しみください。

【ゲスト：末永史尚さんの紹介】

〇佐藤　今年度の番組「ふたたび交わるおどろき」のナビゲーターを務めるのは、私、東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員の佐藤真実子です。

　そして、記念すべき最初のゲストは、美術家の末永史尚さんです。末永さん、よろしくお願いします。

〇末永史尚　どうぞよろしくお願いします。

〇佐藤　今回、末永さんにお越しいただいた理由は後ほど詳しくご説明するとして、まずは末永さんご自身に、美術家としてのご活動、また、東京造形大学でのお仕事なども含めて、簡単に自己紹介していただきたいと思います。

〇末永　美術家の末永史尚です。絵画を中心に、日常的に目にしたものであったり、展示空間に関わる既存のものを対象にして、自分の視覚が反応できるものを探りながら、それを基に、絵画であったり立体であったりといった作品を制作しています。

と言うと、ちょっと、どういうものを作っているのか想像しづらいと思うんですけれど、例えば付箋であったり、段ボール箱であったりというような、日常的に目にするようなもの、何げないものをモチーフに、合板を用いて、それを同じ大きさでパネルを作って、簡略化してペイントするというような立体的なペインティングを作ったり、あるいは画家の名前で検索して、その検索結果画面をモチーフにした絵を描いたりというようなことをやっております。

〇佐藤　ありがとうございます。まだちょっと緊張感が漂います最初の始まりですけど、頑張っていきましょう。（笑）

〇末永　（笑）　はい。

〇佐藤　今ご紹介いただいたような作品というのが、後からお話ししたいと思うんですけれども、「あしたのおどろき」でもいろいろと作っていただいた中に含まれていると思います。

大学でのお仕事については少し触れておきますか。

〇末永　そうですね。今、東京造形大学という美術大学で専任の教員もやっています。今年で5年目になりますね。

〇佐藤　５年目。

〇末永　はい。

〇佐藤　かなりあれですね、割とまとまった期間過ごしたという感じですね。

〇末永　そうですね。ようやく、４年が大体大学一回りという感覚だと思うんですけど、それが終わったというようなところですかね。

〇佐藤　ちょうど私が「あしたのおどろき」とかに関わっていたときはまだ割と最初の頃だったと思うので、大分慣れてこられたような雰囲気も見え隠れしております。（笑）

〇末永　どうでしょうかね。（笑）

【大きなテーマ：振り返る】

〇佐藤　それでは、今日のおしゃべりというのを進めていきたいと思うんですけれども、最初にですね、このおしゃべりの大きなテーマというのをお伝えしておきたいなと思うんですけれども。最初にも申し上げたとおり、「ふたたび交わるおどろき」という番組の大きなテーマは、「ふたたび」という言葉からも分かるように、「振り返る」です。やっぱりこの番組というのが、また先ほども申したんですけれども、東京都渋谷公園通りギャラリーのグランドオープン記念事業の展覧会、いわゆる開館展の「あしたのおどろき」を軸としているためですね。ですので、出展作家のお一人である末永さんをはじめ、ほかにも関わっていただいた方々と一緒に、特にコロナ禍の３年間を中心にいろ

んなことを振り返る、それが目的になっています。

振り返るというのは、その１日とか１時間とか、その時々で振り返るというのもできるんですけれども、渦中、真っただ中にいるときには、そういった振り返る余裕さえないというのが実情だと思うんですね。ですので、今、ちょっと落ち着いた、コロナも少し落ち着いたと言える今なら振り返ることができる、そう思ってこれを企画したわけです。

〇末永　なるほど。

【ギャラリーの今と交わる：「モノクローム　描くこと」展をみて】

〇佐藤　過去を振り返りたいところなんですけれども、ちょっとね、ギャラリーの今と交わっていただこうかなと思って、今、現在開催中の展覧会、「モノクローム　描くこと」を見た振り返りを末永さんとお話ししたいと思います。

〇末永　はい。

〇佐藤　末永さんには、今日この収録の前に展覧会をご覧いただきました。私の同僚が企画した展覧会で、ほぼ白と黒とか、時々グレー、灰色が見えるような、そういった作品だったり、展示室の空間もそういった感じになっていますけれども、見た感想をちょっと最初に。全体の感想はいかがでしたでしょうか。

〇末永　はい。先ほどざっと拝見してきました。一点一点すごく面白かったんですけれど、やっぱりドローイングの展覧会だなと思いました。描いてあるんですよね。モノクロで、例えば黒いモノクロームのペインティングがあるわけではなくて、基本的には描いている。しかも色彩を使っていないので、何か装飾的な意図が入ってきているわけではなくて、ひたすらそれぞれのアーティストさんたちが描く行為に集中している、そういうことが伝わるような作品が集まっているように思いました。

〇佐藤　会場の雰囲気も、割と私なんかは、個人的な好みとしたら、壁を結構立てちゃうようなタイプなんですけれども、今回の展示は抜け感が、全体的に抜けていて、割と大きな什器が何個かあって、そこに黒い大きなドローイングがあって、ちょっと迫力があってという感じのレイアウトにはなっているんですけれども。確かにおっしゃるように、描くという行為、タイトルにも「描く」と書いてあるんですけれども、描くという行為に割と集中、見る側を集中させるような作品が多いのかなとは思いましたね。

【気になった作家①：西岡弘治さん】

〇佐藤　何か気になった、特にこの作家のことは気になったとかありますか。

〇末永　そうですね。まず、やっぱり西岡弘治さんが、私も参加させていただいた「（あしたの）おどろき」展にも参加されていたんですけれど、そのときは楽譜を描き写す作品、しかも割と自由にというんですかね。ゆがんだ形で描かれている作品を記憶していたんですけれど、今回はそれ以外のタイプの作品も出品されていて、墨汁で描いたドローイングですよね。あれは何を描いて、塔のような……

〇佐藤　そうですね。そういった印象のある、はい。

〇末永　作品だったと思うんですが、それが、ほかの作品もすばらしいんですけれど、より伸びやかな描線が使われていて、あと、黒がやっぱりきれいなんですよね、墨汁の黒って。

〇佐藤　そうですね。

〇末永　そこがすごく気になったというか、びっくりしたところでした。

〇佐藤　確かに、私が担当した「あしたのおどろき」の展覧会のときも、西岡さんに作品を出していただいたんですが、割と西岡さんの特徴が一番出るところというんですかね。やっぱり楽譜が特徴なので、そこを抜き出すという感じで作品を選んで展示したんですけれども、今回は点数が多く選ばれていて、かつ、楽譜の作品はかたまってあって、最初の2つに今おっしゃっていただいた墨汁の線が、太めの作品で揺らぎというか、線を引くときの揺らぎとかもうまく出ているような作品があったので、割と1人の作家の中での違いというのも見えたと思います。

【気になった作家②：吉川敏明さん】

〇佐藤　ほかには気になった作家さん、いらっしゃいますか。

〇末永　あと、吉川敏明さんですかね。木炭で紙にドローイングされていたんですけれど、描かれてあるものがタマネギとか、あと、ひょうたんですね。よく知られているモチーフが描かれていて。ただ、その線、勢いのある線で描かれているんですけど、普通のいわゆるタマネギの絵だとか、ひょうたんの絵みたいなのとちょっとずれがあるというか。シルエットか何か、独特の形に変換されていて、すごく印象深かったですね。

〇佐藤　やっぱり黒々と塗っているところの形も非常に特徴的ではあるんですけど、私が少し気になったのは、木炭ならではの、表面の木炭の跡というか、グレーみたいになっているところ、それもまたタマネギがちょっと伸びているような、そういったのも感じさせて。割とグレーの、完全には塗っていないところの面白さというのもあるのかなとちょっと私は思いました。（笑）　個人的な……

〇末永　（笑）　記号化されたタマネギだとか、記号化されたひょうたんみたいなイメージが僕の中にはあるんですけど、そのパターンを外れるという感じ。

〇佐藤　確かに。

〇末永 「ひょうたんをこう解釈するんだ！」みたいな面白さがあって、すごく目を引きました。

【末永さんとモノクローム】

〇佐藤　今回は、色は限られているんですけれども、その分、使う材料というか、さっき、西岡さんだったら墨汁ですし、今の吉川さんだったら木炭とか。あと、堀口さんかな。堀口さんは版画みたいな感じで。版画も割と珍しいといいますか、紙を版として、そこを掘ってという感じではあったと思うんですけれども。そういった面白さもというか、バリエーションもつけてはいると思うんですね。

末永さんの作品には、あんまり白と黒のイメージというのはないというか、近年の作品にはないかなと思うんですけど……

〇末永　そうですね。はい。

〇佐藤　それは何か理由というのは、ありますか。

〇末永　モチーフにするものに色がついているからというのが大きい理由ですかね。初期は、例えば漫画の部分をモチーフに作品を作っていたこともあって、そのときは確かにモノクロームで作っていたものもあったんですけれど、今は色つきのモチーフのものを対象にした作品を作っているので、今は白黒のものはあまりないかもしれないです。

〇佐藤　むしろ今回のモノクロームの展覧会は、描くというか、展示されている作品も、針金のものもあるんですけど、割と線というイメージがあるんですけれども。末永さんはどちらかというと、線で構成されているというよりは面の美しさというか、面の特徴が際立つなと思うんですけれども、そういうところもやっぱり、面がお好きとは言わないけど、面にひかれるところはありますか。（笑）

〇末永 （笑） そうですね。線って難しいんですよ。その人の個性が一番出るのが線だと思うし。それは、自分はなかなかいい線が引けないというか、対象をさらさらっと描いて、特徴を捉えて描くみたいなことがあんまり得意ではなかったので、それもあって、塗ることでどうやったら絵が描けるかとか考えていったのが今の制作にもつながってはいるんですけれど。

〇佐藤　それはやっぱり、後でも出展していただいた作品のことにも触れると思うんですけど、面の美しさというか、塗りの美しさという。美しいという言葉を使うと、ちょっと学芸員としてはどうかしらと思いますけど、塗り込められた色面の強さというか、そういったものを末永さんの作品からは感じるので、それが線ではない面へのこだわりなのかなと思いました。

【「モノクローム　描くこと」展の情報】

〇佐藤　この「モノクローム　描くこと」という展覧会なんですけれども、現在開催中でして、９月24日の日曜日まで開催しております。開館時間は午前11時から19時、夜7時までですね。私たちの東京都渋谷公園通りギャラリーの展示室で行われておりますので、ぜひね、この感想を聞いて興味を持った方はいらしていただきたいと思いますし、こういう感じで、ちょっと簡単に感想を言い合うというのも、なかなかハードルが高いと思われがちなんですけれども、展覧会を見て何かしらは感じることってあると思うので、そういったものを気軽におしゃべりできるというのも、このラジオを聞いている皆さんにも体験していただきたいなと思っています。

【「渋ギャラジオ」のジングルについて】

〇佐藤　小さな振り返りを行ったんですけれども、この番組のオープニングとエンディングに流れる曲、ポッドキャストではジングルと呼ばれているんですけれども、この説明をちょっとしておこうかなと思います。

これはですね、鹿児島市にある社会福祉法人太陽会しょうぶ学園の「otto ＆ orabu（オット・アンド・オラブ）」という音楽のパフォーマンスをするグループがいるんですけれども、その中からですね、６人編成の特別なグループがつくられまして、その「ottotto（オットット）」という特別なグループによる「CLAP（クラップ）」という曲の演奏になります。

もともとotto ＆ orabuというのは総勢30名ほどのメンバーから成るんですけれども、ご自身たちは「心地よいふぞろいな音」をコンセプトに、しょうぶ学園の利用者とスタッフによる民族楽器で構成されたスーパー素人音楽団と名乗っていらっしゃいます。

このottottoという特別なグループは、何度も出てきている展覧会の「あしたのおどろき」の関連イベントのスペシャルセッションで、「あさっての音の発見」というイベント名だったんですが、こちらのために特別に編成されたものでした。残念ながら新型コロナウイルスの感染症拡大によって、このセッションは本当に直前に中止になってしまった。なので、できなかったんですが、皆さん曲を用意してくださっていたので、その曲の中からこの番組のジングルに使わせていただくこととなりました。

「CLAP」というのは、手をたたくとか、拍手というのを意味する単語なんですね。もともとこの曲の最後には、コーラス担当のorabuの手拍子のセッションがあったんですね。それがこの曲名の由来になっているようです。実際のジングルには手拍子というのは含まれていないんですけれども、思わずですね、聞いていると手をたたいて、リズムを取りたくなっちゃうような、そういった心地よい音の集合体なので、この番組のオープニングとエンディングを盛り上げてくれていますので、こちらのほうも皆さん、ぜひお楽しみください。